# 「環伊豆地塊かんらん岩」：その示唆するものと限界

# The Circum-Izu-Massif peridotite and its tectonic implication

# 荒井　章司[1]
# Shoji Arai[1]

[1] 金沢大・理・地球
[1] Dept. Earch Sci., Kanazawa Univ.

http://kgeopp6.s.kanazawa-u.ac.jp/Arai/

嶺岡帯，三浦半島（葉山帯），小仏帯，瀬戸川帯に小規模な蛇紋岩（かんらん岩）体が分布することは良く知られている．これらの一部が堆積性であることは瀬戸川帯において最も明瞭に示された（荒井ほか，1978）．これらのかんらん岩はCaに富む斜長石をしばしば含むハルツバーガイトを主とする点で著しい類似性がある（荒井・石田, 1987）. このかんらん岩類は現在の伊豆地塊の北端を取り巻くように分布していることから荒井・石田（1987）により「環伊豆地塊蛇紋岩」（分布域を「環伊豆地塊蛇紋岩帯」）と名付けられたが，不思議なほどに定着していない．この類似性は極めて重要であり，この地域のテクトニクスを考える上で重要な束縛条件となる．

この環伊豆地塊ハルツバーガイトはある種の海洋底かんらん岩に類似している．斜長石は後から付加（いわゆるmelt impregnationの結果）したものである．ただし，嶺岡帯では島弧的なダナイトも少量存在する．

この類似性の一方で，詳細に見ると極めて明瞭な地域差（不均質性）も認められている．すなわち，

（１）嶺岡帯では現在露出しているかんらん岩と近傍に伴われる蛇紋岩砂岩の構成鉱物が明瞭に異なる．また，構成鉱物から推定される平衡温度も異なる．

（２）地域ごとに，現在露出しているかんらん岩の性質（平衡温度，酸化還元状態，加水度）が異なる．これらの性質から大きく二つのグループに分けることが可能である．

これらの特徴から得られるマントル像は以下のようなものである．

（１） 基本的には中央海嶺（特に高速拡大軸）に類似する．

（２） 一部，島弧的要素が加わる．また島弧→海洋的なセッティングの変遷を記憶している可能性がある．

（３） 平衡温度，酸化還元状態，加水度などに関して横方向に著しく不均質である．

これらに対して，Arai (1991), Arai and Okada (1991)は背弧海盆的なマントル物質を当てはめ，またこのトランスフォーム的断層沿いの貫入を提唱した．この是非を再検討する．